

【福島】77歳の消化器内科医がクリニックを開業-成井貴・サンミカエルクリニック院長に聞く◆Vol.1

生活習慣病予防を軸に、口コミで高知からの来院も

2025年6月30日(月)配信 m3.com地域版



ニュースメールを登録する

サンミカエルクリニック（福島県郡山市）は、院長であり消化器内科医の成井貴氏が、生活習慣の改善を目指して2025年1月、77歳で開院した。開院から4カ月がたった現在、丁寧な食事指導を中心とした治療によって、なかなかできなかった減量に成功した患者も。口コミが広がり、首都圏や遠くは高知県からも患者が訪れている。76歳の時に、一度は診療から退いた成井氏が、再び白衣を着るに至った理由や、診療の特徴について話を聞いた。（2025年5月13日インタビュー、計2回連載の1回目）

▼第2回はこちら

——成井先生は、76歳で総合南東北病院（福島県郡山市）を退職し、77歳の時にサンミカエルクリニックを開業したそうですね。どのような理由で開業に至ったのでしょうか。

総合南東北病院を退職した当初は、開業を意識していたわけではありませんでした。しかし、しばらくするとこれまで診療した患者さんたちから「今はどこの病院で診療されていますか」といったお問い合わせや、「また先生の診療を受けたい」「100歳まで臨床を続けてください」といった励ましの声を多くいただくようになりました。加えて、開業地を提案してくださる方や、資金面で支援を申し出てくださる方も現れました。

そうした後押しを受ける中で、周囲の方々の期待に応えたいという思いが日ごとに強くなっていきました。やがて、残りの人生を生活習慣病の予防や健康寿命の延伸に注ぎたいという気持ちが明確になり、開業を決意。県内で医療機関を引き継いだり、新たに開業したりする医師を支援する「福島県医業承継支援事業」を活用し、開業に至りました。



成井貴氏

——サンミカエルクリニックの特徴を教えてください。

当院の大きな特徴の一つは、「生活習慣への取り組み」を重視している点です。予防医療を診療の主軸に据え、患者さんのお話を丁寧に聞きながら、生活習慣の改善に尽力することを基本方針としています。医療DXを積極的に進めた結果、診療の効率化が進み、患者さんと向き合う時間をしっかりと確保できるようになりました。食事や運動、睡眠、薬の効果に至るまで、患者さんが納得されるまで対話を重ねながら診療を進めています。

糖尿病治療においては、インスリン分泌を過度に促さない「低インスリン血症」を目標とし、炭水化物の摂取を抑えるなどの食事指導を徹底しています。また、インスリンの分泌を促す糖尿病薬ではなく、余分な糖분을尿から排出するSGLT2阻害薬や、腸に糖を排出するメトホルミンを優先的に使用しています。

ロコミが広がり、高知県から来院する患者も

——開院から4カ月がたちました。患者の傾向や運営状況について教えてください。

現在、1日におよそ20人の患者さんが来院されています。患者さんの年齢層は40代前後が中心ですが、小学生や中学生の患者さんを診ることもあります。最近では、健康診断で異常を指摘され、生活習慣病への不安から受診される方が増えている印象です。加えて、糖尿病のコントロールがうまくいかず、体重の増加を気にされて来院されるケースも見受けられます。

患者さんの多くは福島県内にお住まいですが、宮城県や秋田県、さらには東京都、神奈川県、高知県など遠方からもお越しになる方もいらっしゃいます。例えば、食事指導により20～30キロの減量に成功された方が、ご家族やご友人に当院を勧めてくださり、そのロコミでの来院も増加している印象です。

——サンミカエルクリニックという特徴的な名称ですが、どのような思いを込めたのですか。

カトリック教会における大天使の一人、ミカエルにあやかって命名しました。大天使ミカエルは、古くは疫病ペストからローマを救ったとされ、守護や戦いの象徴として知られています。さらに、クリニックのロゴマークには、永遠の広がりと魔除けの意味を持つ「五芒星」を配し、それを取り巻くように大天使の象徴である翼が描かれています。「美しく元気に、あなたの健康寿命を大空に大きく描ききってほしい」という私の願いが込められています。



サンミカエルクリニック
SAINT MICHAEL CLINIC

デザイナーの安達尚弘氏が手がけたロゴマーク

受付から会計まで平均35分、医療DXで対話の時間を最大化

——医療DXによるデジタル化にも力を入れているそうですね。

当院では、医療DXを経営戦略の柱として位置づけ、患者さんへのサービス向上とスタッフの業務効率化を推進しています。予約から会計までの流れを全てデジタル化し、診療の効率を高めるとともに、待ち時間の短縮を実現しています。

来院前にスマートフォンかパソコンから問診票を入力していただくことで、スムーズに診察へ進めます。受付時にはワンタッチでチェックインでき、診察の順番もモニターで確認できます。最先端のクラウド型電子カルテを採用し、検査結果は検査機器から電子カルテに即時反映され、診療の迅速化に寄与しています。電子カルテとレセプトコンピューターを連携させ、事務作業を効率化し、会計ではセミセルフレジやアプリによる自動決済も導入しています。

現在、受付から会計までにかかる平均所要時間はおよそ35分です。医療DX採用の効果として生まれた時間的ゆとりを、全て患者さんとの丁寧なコミュニケーションに充てることができるようになりました。

紙カルテ時代との人員差に「当初はいくばくかの不安を覚えたが」

——紙カルテ時代を長く経験してきた成井先生にとって、デジタル化を進めることは大きな変化だったのではないかと思います。不安や懸念を感じる場面はなかったのでしょうか。

現在の当院の医事課スタッフは1.5人であり、紙カルテ時代との大きな人員差に、当初はいくばくかの不安を覚えました。しかし、「理論的には可能である」と自分に言い聞かせ、事務作業は極力コンピューターに任せること、情報の二重入力をなくすこと、そして全体のシステムをシームレスにすることを目標に掲げ、体制づくりを進めてきました。

医療DXの推進にあたっては、当院の事務長である高倉和之が代表取締役を務める株式会社ポメルスより、全面的な支援を受けました。企業向けにDXを推進する同社は、当院と同じビル内にオフィスを構え、日々密接に連携しています。加えて、行政の方々や、エムスリー株式会社をはじめとする多くの関係者の皆さんにも多大なご協力をいただきました。こうした支えがあってこそ当院における医療DXが実現できたと、深く感謝しています。

福島県は肥満率・食塩摂取量・喫煙率が全国ワーストクラス

——地域の医療課題をどのように捉えていますか。また、その中でサンミカエルクリニックではどのような役割を果たしていきたいですか。

2020年の福島県の平均寿命は、男性が全国ワースト3位、女性がワースト2位という結果でした。背景には、生活習慣病による死亡率の高さがあり、肥満の割合や食塩摂取量、喫煙率などがいずれも全国ワーストクラスとなっています。児童における肥満傾向も、同様に全国平均を上回る状況が続いています。

こうした課題の改善に向けて、福島県では「第三次健康ふくしま21計画」を策定し、健康づくりの取り組みを中長期的かつ発展的に進めています。この計画は、個人や家族をはじめ、地域社会や職場といったさまざまな場において、それぞれが役割を担い、「オール福島」として参画し、協働で健康の維持・増進を図ろうというものです。

当院も、その趣旨にのっとり、生活習慣病の予防に特化した医療機関として、健診後の丁寧なフォローアップや、生活習慣に関する実践的なアドバイスを通じて、県民の健康支援に努めています。診療にとどまらず、書籍やSNSを活用した生活習慣病に関する情報発信にも取り組み、広く啓発していきたいですね。



サンミカエルクリニック

◆成井 貴（なるい・たかし）氏

1975年に弘前大学医学部を卒業後、東北大学医学部附属病院第3内科に入局。1976年より癌研究会附属病院（現・がん研有明病院）に勤務。1982年に東北大学医学部大学院修了。十和田市立中央病院内科医長職を経て、1984年に新白河中央病院を開院。南東北病院消化器内科勤務を経て、2025年にサンミカエルクリニックを開院。

学生運動の激化により政治経済学部を中退し、医学部へ再入学

——早稲田大学政治経済学部を中退し、弘前大学医学部へ再入学された経緯を教えてください。

私は福島県白坂村（現・白河市）の出身です。公務員だった父は20代にして村の助役を務め、白河市の合併に尽力しました。その後、白河市の保健衛生課長として保険行政に携わり、当時全国で下から2番目だった白河市の国民健康保険の財政を黒字に立て直しました。

そのような父の姿に影響を受け、私も医療行政を志すようになりました。医師であり、政治家や官僚として医療行政に関わった後藤新平のような道を目指し、早稲田大学政治経済学部に進学しました。私が大学生だった1960年代後半は、学生運動が激しさを増していた時期でした。私はノンポリラジカルの立場で、純粹に政治学を学んでいたのですが、クラスの委員長に選ばれたことをきっかけに、学内での立場が少しずつ変化していきました。

委員長には執行部を選ぶ投票権があったため、連日のように勧誘や脅迫を受けるようになったのです。身の危険を感じ、登下校の際には友人に付き添ってもらうほどでした。精神的にも追い詰められ、早稲田大学を離れることを真剣に検討するようになっていきました。

そうした中、早稲田大学の上層部が、私の状況を理解し、受験証明書の提出なしに弘前大学を受験できるよう配慮してくださいました。本来、受験証明書は事実上の退学届であり、不合格となった場合は早稲田大学に戻ることができなくなるためです。幸い、弘前大学医学部に合格し、1969年に再入学しました。進学にあたっては弟（成井英夫氏、初代白河市長）と話し合い、「2人で医者になろう。自分は消化器内科をやるから、お前は外科をやれ。そして、いずれは政治家を目指そう」と約束しました。



成井英夫氏

東北各地の病院を駆け回り、実質臓器のがん診断に取り組む

——弘前大学医学部卒業後の歩みについて教えてください。どのような治療に従事してこられましたか。

1975年に東北大学医学部附属病院（現・東北大学病院）の第3内科に入局して以降、消化器内科医として治療学よりも診断学に重きを置きながら診療に携わってきました。特に1976年から勤務した癌研究会附属病院（現・がん研有明病院）では、管腔臓器がんの早期発見のために、上部・下部内視鏡やエックス線による診断に力を注いでいました。当時は、内視鏡がようやく臨床現場に普及し始めた時期で、地方ではまだ導入されていない病院も多くありました。

そうした中、私はがん研の微小胃がん95病変を学会発表させていただいた経験もあり、東北地方の早期胃がん診断のために奔走していました（がん研では5ミリ以下を微小がんと呼んでいました。がんの組織発生を形態学的に研究する思いから中村恭一先生は顕微鏡下に1ミリがん病変をいくつも発見されていました。他施設は1ミリ以下を微小がんとしていました）。実際に10例ほどの微小胃がんや6ミリの十二指腸がんの診断もしました。

——その後、十和田市立中央病院内科医長の職を経て、新白河中央病院を開院されたそうですね。

はい。38歳の時に新白河中央病院を開院し、院長として経営の指揮を執りました。副院長で消化器外科を担当する弟とともに、消化器がんの早期発見と治療にも引き続き力を注ぎました。同院は、日本抗加齢医学会の認定施設となり、これは全国で9番目、北海道・東北地区では初めての認定でした。私自身も日本抗加齢医学会に参加し、第1回の認定医を取得しました。

同院では診療報酬不正請求問題が発生したことがあり、2011年3月11日に発生した東日本大震災の後に再建を検討していましたが断念し、那須高原心臓消化器研究会の医療法人格を2013年1月ごろ県に返納しました。それに伴って行政処分が出されたという経過です（※）。

※編集部注：2013年4月1日付けで東北厚生局福島事務所は新白河中央病院の保険医療機関の指定を取り消す行政処分を出した。

がん研時代には、大腸のde novoがんの世界初症例を診断

——消化器内科医としてターニングポイントとなった出来事がありますか。

学生時代からの目標は、癌研究会附属病院で学び、早期がんを的確に診断できる医師になることでした。その夢がかない、同院の名誉院長である黒川利雄先生の最後の弟子として臨床の現場に参加できたことは、大きな転機となりました。黒川先生は、皇族の方から近隣に住む一般の方まで分け隔てなく診療に当たる全人的な医師であり、私はその薫陶を間近で受けることができました。

がん研時代には、大腸のde novoがんの世界初症例を診断したことも、大きな経験の一つです。加えて、6ミリの十二指腸がんを診断したことも、強く印象に残っています。

——患者さんとの思い出深いエピソードはありますか。

がん研時代に、有名な歌人である患者さんの主治医を務め、最期を看取りました。この経験を通して、芸術活動に深く関わってこられた方の心に寄り添いながら診療を行う難しさを、身をもって実感しました。医学的な知識だけでなく、豊かな教養や人としての姿勢も求められる場面であり、医師として大きく成長する契機となりました。

——診療以外にも、今後取り組んでみたいことはありますか。

福島県を原発汚染などによる風評被害から脱却させ、死亡率・メタボ率などのワーストクラス県から浮上するために一つの希望として、福島県から世界遺産を生み出したいという強い思いを持っています。候補としては、まず尾瀬の自然。次に、会津に根づく宗教文化。さらに、明治の近代化を支えた安積疏水。そして、最後に福島第一原発を“負の遺産”として後世に伝える取り組みも視野に入れています。今後、私が政治家になることはありませんが、残された人生の中で、そうした世界遺産の実現に向けた社会運動に関わっていけたらと考えています。

2診体制も視野に、未活用スペースの改修を検討

——サンミカエルクリニックには、現在はまだ活用されていないスペースもあるそうですね。今後、どのような展開を考えていますか。

現在、当院ではビルの1階と2階を主に使用しており、4階部分については当院で保有しているものの、現時点では活用しておらず、今後の有効な使い方を検討している段階です。

ありがたいことに、当院の理念に共感し、「診療に参加したい」と申し出てくださる先生もいらっしゃいます。今後の患者さんの動向を見ながらにはなりますが、4階を改修し、2診体制を整えることも視野に入れています。より多くの方に当院のことを知っていただき、ご利用いただけるよう、今後は集患に向けた情報発信にも一層力を入れていきたいと考えています。



サンミカエルクリニック

◆成井 貴（なるい・たかし）氏

1975年に弘前大学医学部を卒業後、東北大学医学部附属病院第3内科に入局。1976年より癌研究会附属病院（現・がん研有明病院）に勤務、1982年に東北大学医学部大学院修了。十和田市立中央病院内科医長職を経て、1984年に新白河中央病院を開院。南東北病院消化器内科勤務を経て、2025年にサンミカエルクリニックを開院。